

平成 24 年度 第 2 回重要海域抽出検討会 議事概要

日 時：平成 24 年 11 月 29 日 13：30～16：00

場 所：砂防会館別館穂高（千代田区平河町）

出席者：＜委 員＞白山委員（座長）、桜井委員、武岡委員、中田委員、向井委員
＜環境省＞中澤課長補佐、尼子専門官、中川係長
ほか事務局

＜資料 1 について＞

○3 ヶ年の作業計画と本年のアウトプット

（資料 2 で示した本年の成果物について、抽出基準別の情報図、重要海域図（案）の 2 点であることを全委員承認。）

＜資料 2 について＞

○重要海域図案作成までのながれ（全体の説明は割愛）

第 3 回検討会（2013.1.30）で重要海域図（案）を形にした後で、委員の先生方だけでなく、広く専門家にご意見をいただけるような機会を設けたい。

その具体的な方法については、海洋学会や生態学会等、関連する学会の大会の場で自由集会を行う、アンケートを行うなどを考えている。（尼子専門官）

→3 月下旬に日本海洋学会の大会が行われるが、水産総合研究センターが大会の事務局なので、シンポジウムの日別途会場を設けるといったことはやりやすいかもしれない。（中田委員）

→12/15 までに各委員から適当な学会について事務局に提案をすることとしたい。（白山座長）

→第 3 回検討会（2013.1.30）で、平成 25 年度のスケジュールが分かれば調整可能だと思う。（桜井委員・白山座長）

→来年度は、最速でも初夏あたりから数回の検討会を行うことになると思う。エキスパートオピニオンは複数の検討会の最終回より前には必ず行いたいと考えている。例えば夏から秋にそのような機会を設けることになるかと考えている。（尼子専門官）

→エキスパートオピニオン／ピア・レビューの方法についても、12/15 までに各委員から事務局に提案することとしたい。（白山座長）

→場については提案しやすいが、内容についてはどういうことを考えているのか。（武岡委員）

→過去には、生物多様性総合評価（JBO）の業務の一環として、日本生態学会大会で自由集会を開催し、検討会の委員にも同席いただいて意見交換の場を設けたことがある。会場

にポスターを掲示し、コメント用紙を用意して参加者からの意見を集め、可能な範囲で意見を反映する、といった方法もある。(事務局)

→3月の学会シーズンには、重要海域抽出業務について情報提供を行うことがまず必要だと思う。水産海洋学会、日本海洋学会、日本水産学会、これらの大会会場でのポスターセッションのような方法でアナウンスする必要があると思う。もうひとつは、各学会間で連合する動きがあるので、合同でワークショップを開催することも可能。その場合は初夏前に行うとよいと思う。その時点までの重要海域図(案)のでき具合にもよる。(桜井委員)

→第3回検討会(2013.1.30)での重要海域図(案)の完成度を見てから、どのような方法をとるか、またはその内容についても判断したいと思う。(白山座長)

→本年度中に学会等で情報を公開する場合でも、第3回検討会(2013.1.30)での重要海域図(案)の完成度によっては情報提供にとどめておいて、来年度にエキスパートオピニオンを募る、というような方向で考えたいと思う。(尼子専門官)

→分布データを提供してもらおう場として利用することも可能だと思う。(白山座長)

<資料3、4について>

○基準1 唯一性、又は希少性

・沿岸図について、凡例では種数/件数とはどういう意味か(白山座長)

→沿岸に分布があるものとして、生物情報は分布データを元に種数としていて、基準1-③海氷南限域は、件数として示している。(事務局)

・等量区分とはどういう意味か(武岡委員)

→1-10,11-20,21-30...のような等間隔での閾値設定を試みたが、どこにその種が分布するのか、偏りがあった。そこで、(資料3の2. 等量区分についてを示しながら)全グリッド中の各段階に含まれる情報が等量、各段階のグリッドの数が均等になるような閾値を設定した。(事務局)

→(各委員とも等量区分について了承)

・濃いグレーは陸だと思うが、その外側にあるグレーは何を示しているのか(白山座長)

→水深200mかつ領海を示している。(事務局)

・(資料3の)5ページ目をみると、魚類と鳥類が少なく、無脊椎のイソギンチャク目以下のものが非常に多く出てきていて、それが(図に)大きなインパクトを与えている。要するに情報(分布データ)の多いものがこの図に反映されていて、情報の少ないものは反映されていない、ということがあると思う。高次栄養段階の生物に関しては図に反映しづら

い、ということもあると思う。それをどうするのか。(桜井委員)

→「固有種」という観点で分類群ごとに専門家に問い合わせをしたが、分類群ごとのデータの整備状況等に偏りがあるのは事実。(事務局)

→ここからさらにデータを増やす作業は行うのか。(桜井委員)

→「固有種」を増やすことはできないので分布データを増やすことになるが、海域に関する分布データには限りがある。ここからさらに分布データを増やすのは難しいと考えている。(事務局)

・種の情報と場所の情報を一緒に示しているが、別々に示す試みは行ったか。(白山座長)

→当初は種と場の情報を別に示していたが、情報図をさらに重要海域図(案)として統合すること(技術的なこと)を考えて、情報図では「沿岸」、「外洋」、「海底」という切り口で種と場の情報の集約を試みた。(事務局)

→種だけの情報と場の情報を別にした場合、現在示してある図と大幅に違うのではないか、という点が非常に気になる。(白山座長)

→沿岸に関しては、(場の情報を除いても)それほど今の情報図と大差ないと思う。外洋に関しても物理環境のデータが中心なので、現在示している図とそれほど違いはないと思う。外洋に関しては(場)件数の図になると思う。(事務局)

・種数と海域の特性を示す情報とを一緒に扱うのは問題があるかと思う。種数と物理環境のような在・不在の情報は別なので、種数だけの図を示してはどうか。(桜井委員)

→基準ごとに種のデータとハビタット(場)のデータをそれぞれ評価して、統合する時は種の点数と生態系の点数を加算する方法が合理的ということか。(事務局)

→少なくとも試みてみるべき。種数の図と件数の図を沿岸と海底とそれぞれ示して、4枚の図を作る。種数のカテゴリーで5段階、件数のカテゴリーで5段階とすると、沿岸図で0~10点という点数がグリッドにつく。その方法を試してみてもどうか。それと、今手元にある種数と件数を一緒に示した図が大幅に違うのかどうか、見てみるべきだと思う。(白山座長)

→見てみたいと思うが、提案していただいた方法だとハビタットの方の評価が重くなってしまい、そちらにデータが持って行かれてしまわないかという懸念がある。ご提案いただいた方法を行って両方の結果を比べてみて、種と生態系の点数をどうしたらいいかという点については、次回ご相談させていただくということによいか。(事務局)

・もしかしたら、重要海域図を作成する際にも、種の情報と生態系の情報を分けたままの方がいいかもしれない。(桜井委員)

→種の重要海域と生態系の重要海域に分ける、ということか。(事務局)

→先に(情報図の段階で種の情報と生態系の情報を)合わせてしまうと、種と生態系どち

らの重要さを示しているのか見えなくなってしまうので、統合するまで分けておいた方がよいかもしれない。分けておけば、種の重要海域と生態系の重要な海域とが重なるのか、重ならないのかが見えやすいのではないか。(桜井委員)

・手元にある図は1から、5段階であるが、“0”があって本当は6段階になるはず。どこが“0”なのかこれではわからない。調査してないところと分布データがない“0”のところを区別できるように示してほしい。(向井委員)

→調査したけれどもいない(分布していない)、ということを示すのは、今まで扱っているデータでは区別することは難しい。環境省の基礎調査のデータでは区別がおおむね可能だが、使っているデータ(OBISやGBIFのデータなど)によっては調査していないのか、調査したけれども分布がないのか区別できない。(事務局)

→単純にこのグリッドには何もデータがないことがわかればよい。(向井委員)

→グレーに塗られている部分(領海かつ水深200m)の上に“0”を示す白塗りのグリッドを示せばよい、ということか。(事務局)

→そのように示してほしい。(向井委員)

○基準2 種の生活史における重要性

・魚類の産卵域で行っている解析について説明してほしい。(中田委員)

→まず、すべての産卵場のデータをGIS化した。そのうち、付着沈性卵型、すなわち場に依存するような種と分離浮遊性卵のように卵が海流等の影響で流れてしまう種では性質が異なるのではないかと考え、別々に解析をした。

すべての種の産卵場を単純に重ね合わせて、種数が多い(重なりが多い)ところを抽出するという考え方で解析すると非常に広大な範囲がこれに該当する。その広大な範囲すべてを重要海域とすることはできないので、何らかの絞り込みが必要となる。また、種数の重なりが多いところを抽出すると、例えばエツやムツゴロウのような産卵場が非常に狭い種は洩れてしまう。そのため、すべての種をカバーできるような解析方法が必要だと考え、すべての種が50グリッド以上保全されるように相補性解析を行った。50グリッドに設定した根拠は、すべての種の産卵場のグリッド数を事前に確認し、種ごとの保全目標がそれぞれ概ね50グリッドくらいであれば、産卵場が非常に狭い種と広域の種とが同等に評価されると判明したためである。

基準2の分離浮遊性卵の産卵域の図は、分離浮遊性卵の性質を反映し、場を特定するのが難しいので困っている。一方で富山湾や若狭湾、噴火湾、東シナ海の大陸棚といった場所が拾えているが、黒潮続流のあたりは場が特定しづらい。

閾値を現在の5段階のうち上位2段階くらいにするとある程度場の絞り込みができるので、この解析方法でできるだけすべての種の産卵場が抽出できるだろうと考えている。(事

務局)

・水産庁のデータを元にしてしているようなので、かなり精度は高いだろうと思う。分離浮遊性卵については、水深 200m の範囲だけなら今の細かいグリッドでの解析でよいと思うが、沖は同じサイズのグリッドではなく、外洋図で使用している 30 分グリッドで扱う方がよいと思う。(桜井委員)

→産卵域が沿岸にも外洋にもかかる場合はどう考えればよいか。(事務局)

→機械的に水深 200m より浅いところは細かいグリッド、外洋は大きいグリッドで解析すればよいと思う。(桜井委員)

・外洋については、おそらく 30 分グリッドくらいの精度しかないデータを細かいグリッドで解析したために絞り込みが難しくなってしまったのだろうと思うので、桜井委員の言うように水深 200m で区切って、外洋は 30 分グリッドで解析するのがよいと思う。(中田委員)

→産卵域が沿岸にも外洋にもかかる場合、まず水深 200m で区切って、それぞれ解析を試みたいと思う。(事務局)

・魚類・頭足類とそれ以外の種の産卵域を分けて解析しているのは、広範囲に及ぶ魚類の産卵域のデータに引っ張られないように、と考えてのことだと思うが、そもそも相補性解析はそういった点を考慮できる解析法ではないのか。よって魚類・頭足類とそのほかの種(哺乳類や鳥類など)も一緒に相補性解析を行えばいいのではないか。(白山座長)

→広範囲に及ぶ魚類(50 種くらいほど)の産卵域の絞り込みを先に行い、絞り込まれた場所を沿岸図に重ね合わせようと考えている。(事務局)

→その方法だと、魚 1 種の価値とそれ以外の種、例えば鳥 1 種の価値は異なる、ということになると思う。現時点ですべての種をあわせた相補性解析を行っていないのであれば、それはやってみるべきだと思う。(白山座長)

→ほかの種の産卵域のグリッド数を確認して、魚類の解析のように 50 グリッド以上保全されるように、といった設定の検討をして相補性解析を試みたいと思う。その場合、(桜井委員に向けて)全種で相補性解析を行うと、魚類についてはすべての種の保全目標 1 をグリッドに設定する、というように究極に狭められてしまう可能性もあるが、広大な産卵域を持つ魚類の場合はこれとあわないのではないか。(事務局)

→沿岸域の場合は細かいグリッドで解析を行っているので、ほかの種と併せて相補性解析を行ってみる価値はあると思う。沖では魚類しか産卵場がないと思うので、(EEZ 内)全体における沿岸域の重要性、というのがわかると思うので、全種で相補性解析を試みるとよいと思う。(桜井委員)

→沿岸と外洋で解析の精度を変えて、全体で相補性解析を行いたいと思う。(事務局)

○基準3 絶滅危惧種等の生育・生息地

・ホットスポットを示した図に比べて相補性解析の結果の図はきわめてグリッド数が少ないが、これは絶滅危惧種の分布域がそもそも非常に限られているから、という解釈でよいか。(白山座長)

→絶滅危惧種は分布域が非常に少ないため、このような非常に絞り込まれすぎたような図になっている。(事務局)

・IUCN が指定している絶滅危惧種で日本で分布がわかっている種については、今回の解析に利用しているか。(白山座長)

→EEZ の範囲内での絶滅危惧種の評価に主眼を置いている。IUCN によれば世界的に危機的状況にある種でも日本では普通に見られる種については今回の解析には入れていない。

IUCN の分布データの利用も検討したが、分布範囲が広域に及んでおり、解析に利用しにくいと判断した。(事務局)

→IUCN が絶滅危惧種と指定している種の分布データは、IUCN が公開しているデータではなくてもほかの情報源があるだろうから、そちらを利用したらどうか。(白山座長)

・昨年度、IUCN のレッドリストも検討すると決めたが、事務局側で懸念している点は何か。(尼子専門官)

→IUCN のレッドリストについても事前に検討したが、分布データがほとんど得られず、離散的な情報しかない。環境省としてそれでもよい、ということであれば、データを利用したいと思うが、どうか。(事務局)

→サンゴの分布データはあると思うが、利用できないのか。(白山座長)

→サンゴの種の分布情報は、国立環境研究所の山野氏の論文データを利用することが可能であれば解析に用いることもできると思う。(事務局)

→IUCN の分布データを利用する、ということではなく、IUCN が絶滅危惧種と指定している種について国内の分布データを利用して解析してほしい。(白山座長)

→種の分布データがあるものについては解析に反映したいと思う。(事務局)

・ホットスポットと相補性解析では同じデータを用いて違う見方をしている、ということだとしたら、どちらを採用するのか。(向井委員)

→ご意見を伺いたい。EBSA の基準によると、絶滅危惧種の種数が多い場所が重要、としている。素直に考えるならホットスポット解析で良い。しかし、ホットスポット解析だと、種数の重なりが少ない、という理由で基準からもれてしまう種が出てくる。(事務局)

→相補性解析を行うとそのような種も救われるのか。(ホットスポットと相補性解析の図を

見比べると) 相補性解析の図の方が選ばれている場所が少ないので、ホットスポット解析の方がより多く選ばれていて良いように思える。(向井委員)

→のちほど資料 5 で説明しようとしていたのだが、基本的には重ね合わせて点数の高いところの積算値を用いた解析としたいが、それで漏れ落ちてしまう場合は相補性解析で補うことを考えている。(尼子専門官)

○基準 4 脆弱性、感受性又は低回復性

・種数と件数は分けて解析する。少なくとも検討してほしい。(白山座長)

○基準 5 生物学的生産性

・沿岸図で非常に精度が高く解析されているが、精度の高いデータがあった、ということか。(白山座長)

→精度の高いデータではないので、小数点以下は示さない方がよいと思う。修正する。サンゴ礁の被度のデータは国立環境研究所の山野氏が衛星画像から最近解析を行ったデータを用いているので、精度はそれほど悪くはない。海草・海藻藻場のデータについては、データが古いということと消失など動的平衡を考慮していないため精度は低いと思う。(事務局)

・海草・海藻藻場の面積を単純に足し算してよいのか、という点も気になる。(白山座長)

→藻場でも海草と海藻とでは生産量が何倍も異なることは論文等で示されているので承知している。海草と海藻藻場を分ける試みも行ったが、海草と海藻とが 1 つのグリッド内で混生している場合は分けることができないため、このような示し方となった。(事務局)

・外洋図、クロロフィルの濃度の図でもグリッド数が等量になるように区分していると思うのだが、その分け方で良いのか疑問。生産性と言ったときに、湧昇などの影響を見たいのであれば、文献中では $1\mu\text{g/l}$ 、 1mg/m^3 、といった値がよく使われる。(中田委員)

→その基準となる値について文献など教えていただきたい。(事務局)

→クロロフィル濃度については、生物学的に意味のある閾値を用いるべき。(白山座長)

→「生物海洋学」のような教科書的な文献に載っている年間のクロロフィル量を 5 段階で示している値を用いればよいと思う。(桜井委員)

→参考にしたいと思う。クロロフィル濃度に関してはグリッド数を等量にする評価ではなく、文献を参考に生物学的に意味のある閾値を設定したいと思う。(事務局)

・日本周辺は基本的に生産性の高い海域なので、値の高いグリッドが多くなってもそれで良いと思う。(白山座長)

→沖ノ鳥島や南鳥島などはクロロフィル濃度が低い場所だが、評価に入れるのか、足りきを
を
してしまってもよいか。(事務局)

→日本の EEZ 内なので足りきせずに評価して、0 点になるのならそれで良いと思う。(白山
座長)

→他の基準ではグリッド数を等量にして評価するが、この基準(クロロフィル a 濃度)だ
けはグリッド数等量での評価ではなく違う考え方で評価する、ということになるが。他の
基準でも生物学的に意味のある閾値の設定を行ってもよいと思う。(武岡委員)

→もし、そのような閾値が基準別であればご教示いただきたい。ただ、種数の積み重ねの
場合は等量以外の閾値の設定は難しいと考え、今回はこのような示し方を提案した。(事務
局)

→もし、世界基準で示しているものなどがあればそれを用いてみるとよいと思う。(白山座
長)

→クロロフィル濃度の図だけ EEZ の外側も色が塗られているが、EEZ の外側のグリッドも
含めて等量にしているのか。(武岡委員)

→EEZ 内のグリッドだけで等量評価している。EEZ の外側も示した方が分かりやすいと考
え、示しただけである。(事務局)

○基準 6 生物学的多様性

・生態系の多様性というのはかなり無理がある気がする。(白山座長)

→種の多様性だけに絞っていきたいと思う。(事務局)

・種の多様性(ES10)では、(他の基準で用いている沿岸 5km・外洋 30 分のグリッドとは
異なり)沿岸・外洋とも 10 分グリッドで解析している。外洋は他の基準と同じく 30 分グ
リッドで解析し直したいと考えているが、沿岸を 5km グリッドで解析すると、多くのグリ
ッドで ES10 が算出できなくなってしまう。かといって、沿岸も 30 分グリッドにしてしま
うと精度が低すぎるのではないかと悩んでいる。(事務局)

→他の基準とグリッドのサイズを変えた理由をもう一度教えてほしい。(向井委員)

→例えば瀬戸内海のような複雑な地形の海域で、その中でも種の多様性が高い場所とそう
でない場所とがあるのに、30 分グリッドで解析してしまうとそのような実感とは大きく乖
離してしまう。といって、グリッドを 5km まで小さくしてしまうと 1 つのグリッド内の標
本数が少なくなるため、多くのグリッドで ES10 の算出すらできなくなってしまう。(事務
局)

→外洋は他の基準と同じ 30 分グリッドで良いと思う。この基準だけ異なるのは違和感があ
る。(向井委員)

→外洋は 30 分グリッドで解析し直したいと思う。(事務局)

→沿岸に関しては、理由は分かったので、この基準だけグリッドサイズが大きくてもよい

と思う。(向井委員)

→この基準だけは、沿岸は今回示しているサイズでの解析になるのはいたしかたないと思う。その場合でも、30分グリッドを4区分するなど、30分グリッドと緯度経度がうまくそろうようにしてほしい。(白山座長)

○基準7 自然性

・自然性を示す指標種として挙げられている種の中に北方に生息する種がほとんど示されていない。(白山座長)

→北方と日本海側のデータが無い状態なので、先生方からご提案があればぜひ伺いたい。(事務局)

→自然度指標種に関しては、他の専門家を紹介したり、この(委員)メンバーで提案する、ということになると思う。(白山座長)

→北方に生息する種を増やすことも必要かもしれないが、分布データが無いのか、該当する種が無いのか、区別しておく必要があると思う。今示してある図では自然度が低いところが評価されているように見え、実感にそぐわないように思う。(向井委員)

→事務局では藻場の情報が足りないと感じている。干潟に生息する種に偏っていると感じている。分布データが無い場合も多く、悩みである。藻場の自然性を示す指標種を先生方にご提案いただいたり他の専門家に伺うなどして種を増やして、分布データがあるかどうか確認して、できる限り情報を追加したいと思う。(事務局)

→藻場に関しては、モニタリング 1000 沿岸調査でデータがどんどん追加されているので活用してほしい。(向井委員)

→モニタリング 1000 沿岸調査は調査地点が限られている。(事務局)

→モニタリング 1000 沿岸調査の調査地点のデータをそのまま使うのではなく、モニ 1000 調査で調べられた種を選んで、分布データは OBIS などを利用する。(白山座長)

・ウミガメ産卵地、は種とカウントするものではない。ウミガメの「産卵地」というのはウミガメの生活史において重要な場所という意味で基準 2 に該当するけれども、自然性を示す「種」というカテゴリーにウミガメの「産卵地」をいれるのはおかしい。ウミガメという「種」ということであれば、該当すると思う。(白山座長)

→ウミガメに直したいと思う。(事務局)

・自然性に該当する種について、具体的に挙げていただきたい。(事務局)

→期限を決めて種を挙げてもらうことにしたい。12/15 までに自然性を示す指標種に該当するだろう、という種について事務局へ回答する。あるいは、自然性を示す指標種について提案できる専門家を事務局へ紹介する、ということにしたいと思う。(白山座長)

○基準8 典型性・代表性

・種数／件数と示しているが、利用データすべて典型的な場所、という考え方でとらえられるので、件数だけの情報図に修正したいと思う。(事務局)

・外洋域の図に利用しているデータのうち、Marine IBA (Important Bird Area) のデータは、ある海鳥の繁殖地点から採餌域を含めた場所を示していて広範囲に及んでいる。そのため、情報図も比較的広範囲で色が濃くなっている。(事務局)

→他の基準に比べて元データの精度が違うので、それらを等価と評価するのは違和感がある。(白山座長)

・Marine IBA のデータは日本にいる種だけなのか。ミズナギドリなど渡りで来る種のデータも含まれているのか。(向井委員)

→海鳥を中心にしているが、ミズナギドリなどの種も含まれている。(事務局)

<資料5について>

○重要海域図(案)の作成方針について

・グリッド数が等量になるような区分でいいのか、積算するのに単純な足し算でいいのか。(向井委員)

→グリッド数が等量になるような区分については、基準ごとに生物学的に意味のある閾値の設定も検討したいと思う。足し算に関しては、抽出基準間で重みづけを変える、ということか。(事務局)

→うまくできるかは分からないが、全基準等価でいいのかどうか疑問に思う。(向井委員)

→CBDで行っている作業の場合はどうしているのか説明していただいて、CBDと全く同じ方法で行うのか、それを参考にしつつも日本独自の方法にするのか検討したいと思う。(白山座長)

→GOBIがEBSA基準を満たす海域の記述作業を地域ワークショップで進めている。ここでは基準ごとの適合度をHIGH、MEDIUM、LOWの3段階で評価し、それらの総和を出している。具体的な計算過程については書かれていない。国際基準にのっとりるのであれば、生物学的な意味があれば等量である必要はないと思うが、基準間の総和を使うのがよいのではないかと考えている。一方で、この種はどうしても拾いたい、というような地域固有な評価は国際基準にはのらないので、補足的に相補性解析を使ってはどうかと考えている。CBDの資料からは各基準間の重みづけに関する情報は見つけることができなかった。例えば、絶滅危惧種は政策上重要だといったご意見があればお伺いしたい。(事務局)

→いろいろ試行してみるしかないのではないかと。まずはシンプルな方法で解析して、その結果を見て評価をしていくことになると思う。少なくとも、全ての基準で相補性解析

を行って普通に積算した場合との違いを評価するという事は確実にやっていただくという理解で良いか。(白山座長)

(→各委員とも了承。)

→相補性解析ができない基準も 1,2 種類あるかもしれないが、基本的には全ての基準で相補性解析を行う方向で進めたいと思う。件数が非常に少ない場合は相補性解析を行うことはできない。(事務局)

・最終的な重要海域図を作成するときにはどこかで線引きをする(くくり線を引く)ことになると思うが、なにか基準はあるか。(白山座長)

→愛知目標及び生物多様性国家戦略で定めた海洋保護区の目標を念頭に置きつつ、将来的な海洋保護区の検討の基礎資料として使いやすい形にしたい。将来的な海洋保護区の目標が 10%なので、それよりも広い範囲が重要海域として含まれるようにはしたいと考えている。現段階では EEZ の何%と具体的には決めずに、総合点の高かったグリッドから、それぞれが EEZ の何%になるかを算出していき、あるところで線引きしていきたい。(尼子専門官)

・コアゾーンとバッファゾーンの考え方をどう扱うか。ただ単に重要海域だけ抽出するのではなく、各基準別の情報図を有効に使う、コアゾーン、バッファゾーンも考えておく必要がある。さらに、情報が無い、と示された場所=白塗りの場所は調査が不足している、といったところにも踏み込んでほしい。(桜井委員)

→評価が低かったところに対するケアもしてほしい。重要でないから評価が低かった、ということももちろんあるけれども、情報が無いから評価が低い、という場合もあるので、それについても明示してほしい、というご指摘だと思う。(白山座長)

・8つの基準をまずは単純に重ね合わせてみて、その先どのように評価するかだが、同じ基準で日本全国を機械的に評価するのはなじめない。単純に重ね合わせてある程度目星がついたところを、例えばある一つの海域についていろいろなやり方で解析・評価してみる、というのはどうか。もっと現場を意識したやりかたで基準間の足し算の仕方を考えてはどうか。(向井委員)

→カルテを作成するので、そこで海域ごとに個性がでてくるのではないか。(桜井委員)

→例えば、種の多様性、希少種というのは南の方が評価が高くなると予想される。そのようなことを念頭に置いて評価をしてほしい、というご指摘だと思う。例えば、北海道の沿岸だけでの解析を少なくとも検討してほしい。(白山座長)

以上